

# 対人支援点描 (24)

「新型コロナウイルスと偏見差別」

小林 茂 (臨床心理士/牧師)

はじめに.

前号に続き、今回も新型コロナウイルス関連の話題をすることになった。社会の新型コロナウイルスについての話題は、今年になって、それこそいろいろなところで話題とされ、多くの専門家が論じ、紹介している。感染症の専門家でなくても、インターネットや SNS など話題とされている。

この号の対人援助学マガジンが発刊される頃には北海道の状況も変化していることだと思うが、現在(2020年11月9日時点)、北海道の新型コロナウイルスの感染が今年一番の勢いで拡がっている。冬季に入り、空気が乾燥するこの時期にウイルス性の風邪が流行することは予想されていたことでもある。実際に新型コロナウイルス感染の拡大のニュースが拡がると、北海道内の人々の動揺も大きなものとなる。

この動きと並行して、この小論でも取り上げるに至った理由は、私が働く教会と幼稚園があるえりも町内でも感染者がでたことにある。この出来事から町内で起こった身近な話題として、ここで取り

上げたいと考えたからである。

## 1. 小さな田舎町で感染者が出るということ

もともと北海道では、全国でも早い段階で「非常事態宣言」が出された。その警戒と対応もあり、その宣言による拡散防止効果の実よりも、北海道民にある種の危機感を持たせることに成功したといえる。しかし、夏以降から政府の GoTo キャンペーンや全国の拡大の縮小傾向のニュースに人々の警戒の気持ちも薄らいできていた。北海道随一の繁華街であるすすきのでも警戒の解除が進み、人々の出入りも少しずつ戻りつつあった。10月までの間に、どこか気持ちのゆるみが生じてきていたといえる。幼稚園の関係者からは、えりも町内のスーパーでマスクをせずに買い物に來たり、入店時に手の消毒をしないお客が目立ってきているという話もあった。

このような話題が身近な話として語られて程なくして、えりも町内で感染者が出たという話が伝わってきたのであった。状況としては、えりも町内に務める会

社員が新型コロナウイルスに感染したということであった。その会社員の方の子どもが、たまたま私の勤める幼稚園の卒園生であったため、私にとっても身近な話題となったのである。

結果、その会社員の方だけではなく家族、同僚、その子ども、子どもの同級生たちが濃厚接触者としてPCR検査を受けることになった。同時に、会社のその部署や学校のクラスが学級閉鎖となっていった。また、それに止まらず、幼稚園の関係者の子どもも同じクラスであったことから、幼稚園の関係者らも自宅待機となった。幼稚園の関係者らは濃厚接触者でもないし、学校のクラスの子どもの誰も陽性者ではなかったのだが、子どもたちが自宅にいる以上、親である立場の人も子どもだけにしておけないため自宅待機となったわけである。

改めて、一人の感染の出来事が、濃厚接触者だけでなく、もっと広い範囲にまで関係し、その生活に影響を与え、さらに周りにある関係者(この場合、職場、小学校、幼稚園、役場、保健所など)にまで影響を与えることを実感することになった。

このことにより、社会のニュースとして遠い話であったものが、一挙に身近な話題、身近な実感として当事者感覚にまで近づいたわけである。

## 2. 新型コロナウイルス感染の心ないうわさや偏見

小さな田舎町に感染者が出たことにより、表にある新型コロナウイルスの症状が患者に与える問題よりも、小さな社会が与える問題の方が裏側でじわりじわりと影響が現れるようになっていった。実際、

新型コロナウイルスの感染は、適切な治療により大事にならず、濃厚接触者の検査結果も心配が必要なものではなかったのであるが、人々の心に与えるものは大きかったのである。

つまり、実際には、どこで感染したかもわからない感染経路であるのに、感染した会社員が札幌の繁華街に飲みに行っていたという事実とは異なるうわさや、その会社員家族への保菌者の疑いや偏見、学級閉鎖になったことによる子どもの感染不安、仕事を休み子どもにつきそう親の不安、高齢者施設の活動自粛が暗に子どもに与える雰囲気の変化((注)町は共働き世帯が多く、3世代同居家族も多いことがある。)が精神的に不穏にさせたわけである。しかも、この精神的な不穏は、時間の経過とともに影響が増して尾を引いている印象がある。

こうしてみると、新型コロナウイルスというウイルスそのものや症状の問題よりも、そのことによる社会からの精神的な影響の方が広く悪影響を生じさせていると指摘できる。

## まとめ.

2020年5月29日(金)の北海道新聞に、北海道臨床心理士会の前田 潤会長の「新型コロナ ストレス、不安とどう向き合う」という記事が掲載された。

その記事には、「本来の敵はウイルスなのに感染者を責めたり排除したりしてしまう。」「...感染者とするのは自己責任ではないかということになると、自分や周囲への不安や不信感につながり、感染対策や自粛を相手に求める気持ちが過敏になったりします」「新型コロナは感染の不安

を呼び、それが差別を生み、周囲への不信と孤独感を深めます」などの指摘がなされている。

まさに、この記事で指摘されている事柄が生じてしまったのである。

このことは、実はもう他の地域で当たり前のようには起こっていたのかもしれない。けれども、今回、私の生活する町、勤める幼稚園を介して、改めて身近な問題として考えさせられた。

普段から「小さな田舎町は、すぐうわさになる」とステレオ・タイプの話があるが、人のつながりが濃く、わかりやすいからこそ、人伝えにうわさが届きやすいのだろう。だからこそ、不信感を生みだすようなうわさではなく、人のつながりの濃さを活かした支え合いやいたわりが活きるような働きかけが必要に思う。